
俺は鈴木陽一なのに気がいたら女エルフになっていた

ワシワシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は鈴木陽一なのに気がついたら女エルフになっていた

【Nコード】

N4124W

【作者名】

ワシワシ

【あらすじ】

昔勇外伝。気がついたら女エルフになっていたでござるのモブキヤラのTS話です。不幸な出来事が起きる前触れとして、異界に流された一般人のプロローグⅡエピソード。続きません。某所に投稿していたもの（現在削除）を少し手直ししてあげています。某エルフに捧げる。

（前書き）

昔勇外伝。気がついたら女エルフになっていたでござるのモブキャラのTS話です。不幸な出来事が起きる前触れとして、異界に流された一般人のプロローグ。エピソード。続きません。某所に投稿していたもの（現在削除）を少し手直ししてあげています。某エルフに捧げる。

エレボス。

享樂の都という人がいる。

永遠の華だと誇る人もいる。

陰の呪術国家と罵る人もいる。

様々に二つ名を冠されるこの国は、もう一つ隠された名がある。
地獄の大釜の蓋。

文字通り、魔界を封じる大地の蓋としての姿である。

エレボスの国民は天体の運行を奉じ、呪術による国家鎮護を礎としているが、それは同時に知らずして、地上にあふれ出んとする魔界を封じるものであった。

しかし、運命の日は来たり、天界、魔界、人界、冥界を巨大な地
<時>震が走り抜けた。

その被害は甚大で、神々も照覧して俄に蠢いた程であった。

ある竜はでたらめにのたうち、ある者は弾け、そして地獄の大釜
の蓋は——『ずれて』、外れかかってしまった。

エレボスはたちまち、人知れずして異界と化した。

この影響は、様々な種族の運命に波紋を投げかけたが、特に際立
って人生をねじ曲げられた人物が一人いる。

鈴木陽一。24歳。

陽一は日本人である。一浪の末、私立大学を卒業して、就職後二
年目の若造であった。

彼は、よくも悪くも凡人の域を出ない男だった。

しかし、時空を超えた激震は、津波が海と陸の境を侵犯して、斜
面を這い上がるがごとく日本の地に及び、波が引き戻されるに当た
ってこの世界に彼を無理矢理さらってきた。

肉体ならぬ精神のみを元の身体よりはぎ取って、ある異世界の『女』の中に放り込んだのだ。

故意も作為もない。運命の女神の戯れということすら生易しい。意味など、まったくない。何一つとして。

たまたま、津波に浚われた。たまたま、台風の被害にあった。

いた場所が悪かった。タイミングが悪かった。

同じレヴェルで、たまたま、世界規模の災禍に、巻き込まれ、規模の大きさのために、世界を超えてしまった。

それだけだ。

残酷なまでに無意味だ。

あるいは、『ある神』の『意図的』な屠殺における、前哨であつたかもしれぬ。陽一はあくまで悲劇の魁^{さきがけ}たる象徴でしかない。

こうして、彼は有象無象の役者の一人として、異世界の舞台に押し上げられたのである。

舞台は焼け熱した鉄板にも似て、彼<女>は跳ね上がり、苦悶し、生きるために生きてゆかねばならなくなった。文明の利器などない。人道など、人権など、大いなる変革の前には、木の葉一枚の価値もない。

まさにこの生き地獄で、彼<女>は今後生き抜かねばならない。始まりはしめやかに、そして容赦ない地獄の低音とともに始まった。

炎の雨が降り注ぐ。

上空を竜のようなもの、否、竜が飛び交い、炎のブレスを吐いている。陽一は逃げまどう人々の中、一人呆然と立ちつくして、阿呆のように空を見上げていた。

何だこれは、と胸中に独りごち、分からないと反芻する。

いや、分からないことはない。あれは竜だろう。東洋の蛇に似た細長い姿ではなく、銅の太い蜥蜴に蝙蝠のような？根が生えた姿は、竜以外のなんだというのか。

しかし、竜は空想上の生物だ。それが空を黒々と覆い尽くさんばかりに大群となって飛行している。

黒光りする鋼鉄の鱗に覆われた大群が一路目指す方向は同じ、明らかに統制の取れたそれらは、異様な雰囲気をもって街の中に突き出た城へと向かう。城、と再び瞠目する。

円天井を囲む尖塔を四方に配した宮殿だ。何故宮殿がある。

そもそもここは、と周囲を見渡せば、黒髪黒目に平淡な顔立ちの日本人はどこにもいない。明らかに西欧風の面立ち、まして時代錯誤な中世のように思われる衣装の人々が悲鳴を上げ、家財道具を荷馬車に積み上げ、あるいは手に持って城門へと走っていく。

中世風、との印象を覚えた次の瞬間には、ぬぐいきれない違和感が過ぎった。陽一も西欧のファッション史に詳しいわけではないが行き交う人々に違和感はますます強くなって行く。

顔立ち、服装。そう、強いて言うなら、ファンタジー的なのだ。

どこの文化圏にもそぐわない、まるでファンタジーゲーム中に出てくるような奇抜な様式の印象を抱く。

（ファンタジー？）

そもそも竜自体がファンタジーの象徴のようなものではないか。ばかっている、空想だ。だが、と膝頭は理性に反して、がくがくと震え出す。

（ファンタジーだと？ クソ喰らえ）

こんなにもリアルなのに、空想なわけがあるか。

自分の頭から捻り出した妄想なら、金色に飛び散る火の粉が肌に火ぶくれをつくり、熱気とともに黒煙が喉を痛めるこの痛みすらも否定しなければならない。

だが、すぐに頭を振った。こんなばかげた光景を現実と認めることは容易ではない。

（夢だ）

「邪魔だよ！」

避難する人々の波に突き飛ばされ、陽一は体勢を崩して、路上へ

無様に尻餅をついた。

「いつてえ……」

何すんだ、この野郎（突き飛ばしたのは中年の女だったが）、罵りかけて、はつと口を噤んだ。

違和感の鳴らす警鐘は最大のものとなる。

視線を落とした先、路上についた手は、ほっそりとした指先で、白い甲に付着した真つ黒な煤により、なおいつそう青白さが際だつ。おそろおそろ指を掲げ、照り映える炎に透かして、表裏に返した。華奢な手には、桜色の爪が十指の先を飾り、到底己の手とは信じられない。

「なん……」

なんだこれ。

呑み込んだ言葉は、かすれて甲高い。まるで女のような。ぎくりとして、喉元を押さえた。俯いた拍子に、まとわりつく気持ち悪さの正体の一つに気づく。空と大地を染める暴力的な赤と黒の衝撃が強すぎて、さらりとこぼれ落ちた豪華な色に意識が回らずにいた。ようやくそれに気づき、認識するとともに、陽一は不思議に思い、目の前の金糸を引っ張った。

痛い。

何故痛い。

金糸を引っ張ると、連動して頭皮が痛い。まさかこれは俺の頭から生えているのか。肩口をさらさらと滑り落ちる金糸は人工に染色されたとは思えない自然から生じる美しさがある。

陽一は頭をかきむしり、勢い数本を引き抜く勢いで、指に絡まる長い金色の髪の毛に息をのんだ。染めた覚えはない。まして、こんなに己の頭髮は長くない。

「何なんだよこれ……」

再度漏らした声は、明らかに女のそれだった。ざわざわと足下から脳天まで肌が泡立ち、見下ろした自分の姿に絶句する。着脱した覚えもないのに、落ち着いた若草色の胴着を身につけているが、胸

の辺りの膨らみはなんなのだ。震える手で胸部をわしづかみにして、頭のヒューズが弾けた。

柔らかい。大盛り特大とはいかないが、胸だ。二房の脂肪の塊がある。揉みしだいたのは理解が及ばず、感触による確認のためで、他意はない。押し返して来る柔らかな感触にも、ひたすら現実感がない。炎が迫り来て、まして自分の身体が見知らぬものにすげかわってしまった今、疚しい喝采を上げる余裕など一切なかった。まさか！ と下半身に思い至り、恥も外聞もなく片手を突っ込んで、血の気が下がる音を聞く。

「ない………」

大事なものがない。ない。ない。ない！

悲鳴と怒号が満ち、人々が逃げまどう中、陽一は一人命の危機以上己のアイデンティティの崩壊で自失呆然としていた。

ほとんど思考が麻痺して、木偶の坊と化した陽一の側を、馬上から必死に注意を促す憲兵が数騎駆け抜ける。と、その中の一騎が手綱を引いて馬首を巡らし、陽一の元へと戻ってきた。

「森のお方！」

呼びかけは、まっすぐ陽一を指している。だが、陽一は思わず背後を振り返って、逃げまどう人々を目にし、再び視線を戻して、

「俺？」

己を指さした。憲兵はそぐわぬ言葉遣いに一瞬不思議そうな表情をしたが、すぐに切り替えて頷く。

「森のお方とお見受けしました。このような馬上より突然の非礼、誠に不躰ではありますが、今はトリエステ存亡の危機。平にご容赦願いたい」

陽一は目が点になった。何を言っているのか、さっぱり意味が分からない。森のお方とは、自分のことなのか。森の方ではなく、島国の者なのだが、問題の根源はそこではない気もする。

陽一の混乱など一切知らず、憲兵は立て板に水のごとくまくし立てた。

「ご覧のとおり、劣等竜が宮殿へと雪崩うつて猛攻を仕掛けている今、一人でも水の守護が必要です。どうか森のお方にお力添え願いたく、ともに宮殿へと来てはいただけませんか」

馬上より手を差し出し、真摯な眼差しで助力を願ってくる。ご協力を、と告げる一方で、固辞を許さぬ気迫が憲兵をより大きく見せている。その上、人馬一体に高くから見下ろされ、陽一は咄嗟に自らの状況を忘れた。

「いや、まあ、はあ」

強く押しに出られると拒否できない、ここで日本人特有の曖昧さを発揮したのが陽一の敗因である。口ごもった返事を、憲兵は「諾」ととった。むしろ、どのように応じても彼は無理矢理了承ととったかもしれない。それほどまでに彼は、あるいはこの国は切羽詰まって、水際に追いやられていた。

「失礼つかまつる」

一言断って、憲兵は陽一の胴体をすくい上げると馬上へ引き上げた。

きゃあ、ではなく、ぎゃあ！ と叫んだ陽一に、再び憲兵は妙な顔をしたが、事態は風雲火急を告げている。微細些末に拘っている場合ではない。

「ハ！」

馬の尻を鞭打ち、人垣を掻き分けて走り出す。

黒い劣等竜が群がる宮殿へと向かって。

優雅に乗馬を愉しむなどというのは想像を通り越して妄想世界の話であろう。

馬の筋肉は激しく躍動し、大通りを駆け抜けるに至って、陽一もまた激しい揺れと弾み具合に翻弄されていた。いつどのようなタイ

ミングで備えたらよいのか分からない。明日は打ち身と筋肉痛の嵐だろうと半ば諦観に苛まれるが、今は目の前の痛みに耐え、必死に喰らいついていくよりない。そもそも明日は無事迎えられるのであるのか。

舌を噛みそうになりながら過ごすこと十数分、永遠の苦行に思われた乗馬も終焉が来る。

「開門、かいもーん！」

怒声が聞こえ、馬ごと大門から飛び込んだ。

「シルターン殿！」

「現状は！？」

怒声には怒声で答えて現状を確認する憲兵であるが、どうやら彼はシルターンというらしい。内部に待機していた兵士は悲鳴のように報告した。

「第一波の劣等竜の被害は甚大！　ほとんど騎士団が機能しておりません！　加えて、第二波は炎の魔人、使役系下等霊がもはや玉座まで迫る勢いです！」

「使役者は！？」

誰何する声に、悲鳴と怒号が交わされる中、不自然にも沈黙が水を打った。

臓腑より絞り出すように、槍にすがりながら一人が吐き出す。

「使役者は――腐敗と大逆の魔術師、30年前に国家反逆を企てたココ兄弟です」

シルターンは一時沈黙した。その後、声を張り上げる。

「馬鹿な！？　かの大逆の魔術師達は、陛下御自ら討ち取った筈ぞ！？」

何が何だか分からず、目を回している陽一を放置して、会話は進む。

「ですから、異常事態なのです。死んだ筈の国家反逆者が蘇り、今まさに我が国の中枢に猛攻を仕掛けています」

「ありえません。しかし、かの魔術師は全身串刺しにされてなお死

なず、末期に呪いの言葉を発したというではありませんか」

「それを口にしてはならん！」

老兵が諫めたが、疲労した風情の兵士は口を閉ざさず最後まで続けた。

「『トリエステに呪いあれ。我は冥府より這いずり出ても再び今生に蘇り、汝と汝が国民に復讐を果たさん』」

呪いの言葉に、迷信深い古参の兵士達は、「善き方観じるかな」と右手の平を天に差し向け、左手の人差し指で十文字を描く魔除けの仕草をする。

一方陽一は、これが想像だ妄想だというのを一端丸投げして、会話の断片を拾って必死に現状を整理していた。

これが現実かどうかはさておき、ここは日本じゃない。それは理解した。

察するに、この国はトリエステというらしい。地球上の国ではない。

異世界設定——。

自分の頭がひねり出した妄想にしては、ほとんど極彩色の幻想だ。そして、宮殿にあの黒い竜達——劣等竜とやら攻勢を仕掛け、しかもその空襲にこの国の守備はまともに機能を果たしていないようだ。おまけに空からの攻撃のみではなく、地上からは化け物軍団が王様の所まで差し迫る勢いと言うのだから、はつきりいつて、この国もう終わりじゃね？ と陽一は考えた。チエスでいうなら、すでに初手からキングにチェックがかかった状態だ。部外者にもこれだけ詰みの状態が筒抜けというのだから、現状は推して量るべしである。

また、あの黒い竜やその他城内に入り込んでいるという化け物だが、それらを使役している者がいるという。魔術師、との単語に面白いと乾いた笑いが浮かんで来るが、竜を見た後では今更過ぎるか。その上、魔術師（の兄弟）とやらは、一度過去に国家反逆を企てた末、国王自ら処刑した大罪人だという。

死んだ筈の罪人が蘇り、こうして己を殺した国に復讐せんとその中枢を蹂躪している。

竜はともかく、そればかりは兵士達にも「異常」と言わしめる事態らしい。

これは無論夢ではあるうが、一体自分の頭のどの辺りからこんな荒唐無稽な光景や会話がひねり出されるに至ったのか。

（夢、だよな。そうだよな。熱風とか、尻が痛いのだとか、これ、リアルだけれど、夢だよな）

「シルターン殿、そちらの女人は——？」

かなり今更の問いかけに、シルターンは、はつとしたのか、陽一を馬上より降ろす。

「森の民にご助力頂けることとなった」

「おお！！」

喜色に輝く兵士達の反応に、陽一は変に期待されても何も出来ないと説明する機会を取り上げられた。

（俺は一言も、協力するなんざいつてませんが！ 拉致されたし！！）

過剰に歓迎、期待をかけられている空気を読んで、まずい、まずい、まずい、と脂汗が出てくる陽一に、シルターンが頭を下げる。

「火急故自己紹介もままならず、誠に失礼申し上げました。私は万騎將軍イドウン・シルターンが第一子カイ・シルターンと申します。森のお方、よろしければ貴女の御名をお教えいただけますか」

「いや、あの、俺は鈴木陽一と言いますが」

ただの日本人なので、それより日本大使館は、いや、これは夢ですよね、と続けることはできなかった。

「スズキ殿……異国の方にこんなことを頼むのはお門違いかもしれません、それでもかの国家転覆を謀りし宮廷魔術師の事件以来、魔術と名のつくものを忌避し、退けて来た我が国なればこそ、今貴女のような精霊魔術の使い手が偶然首都に滞在されていることに神の配剤を感じるのです」

ないないないない、というのは陽一の心の叫びである。

「敵は召喚術、不浄な炎に通じる魔術、死霊術に能く長けております。森の民は生まれながらにして清らかな水と風の精霊魔術の使い手、どうぞお力をお貸し下さい。力の限り、身命を賭して貴女の手を護りましょう」

シルターンは触れなば切れんとばかり、どこまでも真剣だった。翡翠色の目に漲る決意が伺える。だが陽一は叫びたかった。

お前はどこに走り去ろうというんだ。勘違いで果てまで突っ走らないでくれ！ と。

（森の民？ 知らんわ、そんなもの。水と風の精霊使い？ どのチート設定エルフだ！）

心中に喚きながら、眩暈とともにパズルのピースが一つはまる音をきいた。

森の民の特徴は、まさにファンタジーにおけるエルフとイコールなのではあるまいか。嫌な符号による嫌な予感はいくぐんと加速して跳ね上がる。震える手でそっと己の耳に触れて――再び顎を落とした。丸くない。笹の葉のように尖っている。

脳内で除夜の鐘が鳴り響く幻聴がした。

種族エルフ（森の民）、性別女。

（そんな俺に誰がした）

道理で胸がささやかだと思った。海外産のファンタジーオンラインゲームをたしなむ彼は、エルフといっても二種類ほど思い浮かぶ。一つ、青銅や褐色肌のダークエルフはボンテージにはち切れんばかりのボディを包んで、胸もかなり大きい印象がある。

二つ、金髪のハイエルフはほっそりと柳のようにスレンダー体型のイメージがある。

あくまで大型オンラインゲームに毒された陽一の抱く偏ったイメージではあるが、例に漏れずなのか。

いやいや、そんな現実逃避に走っている場合ではない。

まずは目の前の勘違いを正すことから。小さなことからこつこつ

と！ と意気込んだ陽一をシルターンが押し倒した。

（ちよ、おま、真っ昼間から衆目で何しやがるこの××野郎が）

と放送禁止用語で罵る前に、ぬらりと黒い影が落ちる。疑問符を浮かべた陽一は、次の瞬間には凍り付いていた。巨大な、あまりにも巨大な、その影の主は――

「G U O O O O o O O O N

！！！」

怪物――牛面人身の異形が天を向いて、喉も裂けよと咆哮する。

大地が震え、人は戦き、恐慌に支配されて戦意を喪失する。筋肉が小山のように隆起する腕に凶悪なハルバードをぶら下げ、愚鈍そうな目がぎょりと散らばる人間を睥睨した。知能があるのかないのか分からない、でも確かに奴は人間（獲物）を認めて、悦びに歯茎を剥き出し、ぼとぼと涎を零した。

（笑ってやがる）

陽一はぞつとした。

化け物の癖に、想像をたくましくして興奮しているのだ。

知性は感じない。だが、知能はある。

そう確信させるいやらしい笑いだった。

怪物には、低レベルではあるが、紛れもなく、想像力を働かすだけの頭があるのだ。

それは、決してよい意味を示さない。そんな予感が陽一を凍りつかせる。

ところで、人間と動物を線引きする一つの指標に、想像力がある。これが悪い方向に働けば、単純な破壊の結果ではなく、その過程にまで創意工夫が及ぶ。例えば、動物は獲物を仕留める為の体力消耗を極力最小限で済ませ、より少ないターンで決着をつけるが、人間はあえて手数を必要以上に多く踏んで引き延ばし、その課程事態を愉しむことがある。

すなわち、獲物をいたぶるのである。

人間だけは、必要充分を逸脱して過剰もしくは無駄なエネルギー

の消費を行う。無駄そのものを愉しむ生き物といえる。

こうした行為の質と方向性は、長ずるにつれて理性が暴力性を抑えるものだが、幼児期においては剥き出しの状態だ。

この仰ぎ見る怪物は、一種子供のもようであった。

想像力に理性の枷がはめられていないが為に、下手をすると、事態はよりいつそう惨禍を極めるかも知れない。

悟って、瞬時に心胆を寒からしめた。

怪物の目に浮かぶのは、理性ある生き物の思慮分別ではなく、蟻を踏み潰し、蝶の？根を引きちぎり、飛蝗の足をもぎ取る子供の残酷な無邪気さだ。

相手の反応をたのしむことはできるが、痛みを思いやることはできない。歪に欠落した想像力は、相手の苦痛を引き出すのにどれほどか子供らしい無邪気で残酷なふるまいに及ぶのであろうか。

「散開せよ！ 各自距離を取れえ！」

シルターンが真つ先に声を上げ、凍りついた時が動き出した。流石に職業軍人だけあって、正気付けば動きに無駄はない。だが、整然と作られた陣も、怪物の無造作なハルバードの一降りで突き崩される。適当に刈り込んでいるかに見えるが、とてつもないパワーとスピードである。一人胴を薙ぎ払われ、「あば？」と間抜けに思える声とともに、上半身と下半身を両断された。理解が追いつかず、己の下半身を上半身は間抜けに見つめて――絶命した。

頭の中が沸騰し、立っていることができなくなつて、地べたに尻をつく。失禁していたかもしれない。何が起きているんだ。何度自問したかも知れない言葉が何度も頭蓋の内をリフレインする。問わずにはいられない。何なんだこれは！

夢だ。夢だ。夢に違いない。それなのに、こんな。

頭上から、血と肉片が降り注ぐ。

（なまあつたけえ）

（なんだこの匂い）

感触。

そして。

「うあああああああああああ 嗚呼あああああ！」

叫んでいるのは陽一だった。

（ありえない、ありえない、ありえない！！！）

（死にたくない）

「ひ！」

無様に逃げようとして、しかしそれすらもできない。

動けない。

動けない＝死だ。

どんなあほたれでも分かる。死んでしまふ。このままでは、死ぬ。

怪物が陽一を見た。見て、笑った。

（なんで俺が標的なんだよ。その辺の兵士を狙えよ。俺非戦闘員、奴ら職業軍人。むしろナイスガイを狙えよ。イケメンは死ねよ）

一瞬の間に思考は支離滅裂に乱れ、指は痙攣し続けた。もはや感覚がない。震えすぎて、ものをつかむ感覚すらない。尻が地面についていることすら分らない。

（たすけてたすけてたすけてくれ）

あまりの恐怖に毛髪が逆立ち、身体が硬直する。

陽一にできたのは、振り下ろされる鈍器をただその瞬間まで見つめることだけだった。

死との対面。

これ以上の恐怖はないと思った。

だが、鈴木陽一は、これより、この時の恐怖を上回る恐ろしい体験を何度もすることになる。

彼が解放されるまでには、あと七百年の時を待たねばならない。

そう、彼の物語はともかく、まだ『彼女』の物語は始まってもないのだ——

（後書き）

蛇足：もともと予定していた今後の展開

いろいろあつて魔法を覚える。死ぬか魔法を覚えるか二つに一つ。
ひどい目にあう。

神々の代理戦争に巻き込まれる。ひどい目にあう。
憑依した女エルフの身内^{エルフ}に会う。問い詰められる。ひどい目にあう。

いろいろひどい目にあう。
アルルヤード上位魔法の塔攻略メンバーになる。ひどい目にあう。
なぜかお色気担当になる。

カーシム・シルターンは、カイ・シルターンの子孫である。振り
回される。

ひどい目にあう。

帰還。ひどい目にあう。

いいことないけれど、くじけない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4124w/>

俺は鈴木陽一なのに気がいたら女エルフになっていた

2011年9月4日12時56分発行